

青竹の
ように

本村
つたえ

青竹のように



青竹のように

発行日 平成三年十月一日

定 価 二、〇〇〇円(本体一、九四二円)

著 者 木村つた江

発行所 なみきみち社

〒236 横浜市金沢区並木二丁目七―三―六二〇

TEL〇四五(七七)二二七一

印刷所 山陽印刷株式会社

〒236 横浜市金沢区福浦二丁目一―一―三

青竹のように

結婚	119
銀座の恋	102
難やの客	81
水ぬるむ頃	70
敗血症	60
東京本郷三丁目	50
峰の雲	38
進学の夢	28
じじばばくずし	21
丹波	7

雲の行方	331
ダストシュート	312
氷解	278
追われるごとく	257
仮ずまい	233
深夜の電話	215
房子の外泊	196
日和下駄	169
復員	148
召集	133

七十五歳の挑戦

——序にかえて

調 布 市 長

吉 尾 勝 征

或る席で、木村つた江さんから自叙記を小説風に著したい、その折に序文をとご依頼を受けて、面映ゆい気持ちと全作品を読み通せずに引受けてご迷惑にならぬかと戸惑いました。

木村さんは昭和三十九年から調布に住まれ、調布をこよなく愛されているご様子、温厚でゆかしさの溢れる反面、芯の通った方であると私の印象に映った。そのことは作品の所どころに投影されていると思います。

ご子息の成長、独立、ご主人を亡くされても調布ブッククラブにおいて短歌や文芸創作の学習を積まれ、又、調布市社会福祉協議会の理事として努められております。

生涯学習の叫ばれている中、七十五歳にして一人の人生道をここにまとめられ、世に問われることは実践そのものであり、賞讃いたしたく筆をとりました。

今後人も人を愛し、調布を愛し、更にご精進とご活躍をお願いいたします。

装丁——木寺靖子

丹 波

丹波は山国である。さして高い山があるわけではないが、どこへ行くにも峠道をこえなければならぬ。平坦な土地は少なく、人々は傾いた山腹を耕して糧を得た。都に近い土地がらであるにもかかわらず、文明の訪れは遅く、暮らしは裕福ではなかった。しかし、この土地に生きる人々は、ねばり強くおのが人生を切り開いていく伝統をもっていた。

「房子、ちょっとここに來て坐れ。お前に聞きたいことがあるさかい」

源吉の怒ったような声がした。

房子が行くと源吉は仏間に正座していた。鋭い目に射すくめられたように、房子は紺の着物の前をあわせて坐った。

「房子、昨日正男と見谷のじいさんの畑へ行っただんか」

房子は黙ってうなずいた。

「畑の瓜を盗んで食べたんか。じいさんは、お前たちが皮むきまで持って来て、むいて食べとる、子供のくせに計画的なやり方や、区長はんとこの子供がそんなことしても、親は知らん顔しとるんか、ゆうてそらえらい剣幕で怒って来よった」

ふだんあまり子供を叱らない源吉が、今日に限って厳しい顔を崩さなかった。

「正男ちゃんが、お前も一緒に盗め、ゆうたつたけどわたしはやつとらん。瓜も食べなかつたんや。正男ちゃんは、歯でむいて食べたつたけど。だけど、皮むきなんか持ち出しとらんで。ほんまや」

房子は必死で弁解した。

正男は房子より二つ年上で、山村には稀な美少年だった。房子は正男と遊ぶのが何よりも楽しかった。源吉はなおも問いつめた。

「じいさんが、皮むきやないとあんなにきれいにむけへん、確かに皮むきでむいとる、ゆうとつた。嘘ついたらあかんですよ」

「嘘やない。歯でむいて食べたつたんや。正男ちゃんに聞いてみたらわかる」

「あほう。あの子がほんまのこと言うかい。房子がほんまのこと言わんちゆうなら、土蔵の中で反省させるけど、ええな」

「お父ちゃん、わたし嘘なんかゆうてないのに、何でよう聞いてくれへんの」

房子はどうしたら父に信じてもらえるかと、いろいろ言ってみようとしたが、出てくるのは涙と泣き声だけだった。源吉は、村中でも一番の頑固者で、嫌われ者の細川のじいさ

んに怒鳴り込まれたのがこたえていた。吼えまくる獅子の狂氣に對して、なす術もなく頭をさげていた屈辱が胸に蘇ってくる。素直に謝らない房子の強情にも腹が立った。

泣き叫ぶ房子を横抱きにして、土蔵の中へ放り込んだ。そして入り口の錠をおろした。日中でも土蔵の中は暗い。戸を閉めればほとんど光は射さない。房子は分厚い扉を拳骨で叩いて、大声をあげて泣きわめいた。しかし、扉はびくともしなかった。長くて恐ろしい時間を房子はただ泣き続けた。祖母のふでがこっそり扉をあけてくれた時は、涙も声も枯れきっていた。

塩田房子は、兵庫県氷上郡鴨ノ庄村字岩戸に生まれた。

岩戸は、市島から北東に向かつて四キロ程入った山裾にあり、三方を山に囲まれた山村だった。山を背に、三十戸程の民家がコの字形に点在していた。村の北側の突き当たりには、明灯山岩戸寺があった。この寺は、法道上人の開基で真言宗西国第八十八番札所になっている。明灯山は標高三百メートル足らずの山で、峰の稜線が県境になっていた。向こう側は、人口五万人の京都府福知山市である。

房子の生家塩田家の先祖は、平安時代にこの地方に根をおろした有力な豪族だった。江戸時代には庄屋として、名字帯刀を許される家がらだった。ところが、明治の維新後はわずかに町二反歩の自作農に零落した。

房子の家族は、祖父篤兵衛、祖母ふで、父源吉、母さよ、兄義雄、長姉こはな、次姉千

代子、弟春彦、妹敏子、末妹順子と房子の十一人からなる大家族だった。

この地方では、毎年米の取り入れが済んだ頃に、伊勢の国から神樂を呼ぶのを習わしにしていた。神樂の一座は七、八人が一団となり、獅子頭を使う者、笛を吹く者、鉦や太鼓を叩く者、皿まわしを見せる者、刀接ぎの芸をする者など、その役割を分担していた。一座はいろいろな道具を屋台に積んで、家々をまわった。各家が出す祝儀の額の多寡に応じて、さまざまな芸を披露するが、獅子頭だけは家の中まで入って来た。獅子頭に頭を噛んでもらうと、そのご利益で、次の年の秋まで病気をせず息災に過ごせるといわれ、大人をはじめ子供たちまで獅子に頭を噛んでもらうのが習わしだったからだ。

その年の秋、物心がついて、獅子の顔を怖いと感じるようになった房子は、大人たちに押さえつけられ無理やり獅子に頭を噛まれた。小さい弟や妹は、異常な経験に泣き騒いでいるが、まだ怖さがわかっていなかった。大きい姉たちは、おそろおそろではあるが、自分から頭を出していた。一人房子だけが、恐怖に顔をひきつらせて逃げまわった。しかし、逃げ込んだ押入で大人たちにつかまり、獅子のいけにえにされると思った時恐怖は限界に達した。股間を熱く濡らす液体の落下とともに、全身から力が抜けていった。

この村は昔から落雷が多かった。ちょうど雷雲が得意やすい地形だったらしく、ある年の夏、寺の下の大樫に雷が落ちて木は根本から裂けて倒れた。村中を揺るがす大音響の恐ろしさは、小さな房子をおびえさせるに十分だった。その後、木の洞には落雷よけの小さな祠がつくられた。

激しく雷鳴がとどろく日には、房子は、くわばらくわばら、と呪文を唱えながら蚊帳の中に逃げ込み、両手の人さし指を耳に突っ込んで、うつ伏せになって音のやむのをじっと待っているようになった。

大正十二年四月一日、房子は鴨ノ庄尋常小学校に入学した。

その日はよく晴れた暖かい日だった。校庭の桜もほころび始めていた。長姉こはなに手を引かれて房子は校門わきの桜の花の下をくぐった。

房子は家を出るときからふくれっ面をしていた。こはなにはその原因が何かまったく見当がつかなかった。毎日指折り数えてこの日を待ちこがれていた房子だったのに、どうしてこんなに不機嫌なのかしらと、こはなは首をひねった。

房子は、母が入学式に来てくれるものだと思ひ込んでいた。着飾った母と一緒に出かけられるのを、何よりの楽しみにしていたのだった。ところが、入学式の数日前に妹が生まれた。母は外出できずに、こはなが代理をつとめた。それが房子には気に入らなかった。

小学校は、村の中央の県道に沿ったところにあつた。房子の家から学校までは、片道三キロの道のりである。岩戸部落の学童は、男女合わせて約三十人。東西二班に分かれて、それぞれ村道を歩いて学校に通った。学校の手前の県道で二班が合流して、一年生から高等二年生まで、男女が別々に並んで登校した。

小学校の校舎は二階建てだった。教室の机も椅子も木製で、二人用だった。房子は学校が楽しくて、二年間一日も休まなかった。学年の終わりの終業式では皆勤賞をもらう程だった。

房子が三年になった時の担任は、鴨ノ庄村出身の若くて笑顔のさわやかな女の先生だった。名を川村よしゑといった。房子はなぜか胸がときめくのを感じていた。

「今日はみなさんの席を決めます。背の順に並んで教室の端に立っていて下さい。男の子と女の子が隣同士になるよう、前の人から順に出て来て下さい。房子ちゃんの隣は一郎君ね」

村の資産家の一人息子で、わがままな森一郎が房子の隣だった。一郎は、クラスで一番のいたずらっ子で、先生も手をやく程の悪童だった。

ある日の国語の時間でのことだった。房子は指名されて席を立とうとした。ところがどうしたとか、腰が重くて立ちあがれない。もう一度と思い、膝に力を入れてふん張った。とたんにガタンゴトンと大きな音がして、椅子が腰にぶらさがった。後ろの席の子供たちが一斉に笑った。横の席の一郎は、にやにや笑っている。房子の黄色いさげ帯の端が椅子の後枠に括りつけられ、房子が立ちあがった拍子に一郎も腰をあげたため、椅子が房子の腰にぶらさがってしまった。

「いつの間に……。こんなひどいことしたたんや……。一郎のごんべされっ」

房子は一郎をにらんで唇を噛んだ。悔しさが胸に満ち、涙が自然にあふれてきた。

「一郎君。罰として廊下に立ってなさい」

川村先生は一郎に命じたが、房子の悔しさはしばらくおさまらなかつた。

それからしばらくして、劇の練習があつた。房子は貧しい鉛筆売りの娘の役だつた。役に熱中するあまり、途中で涙が出て台詞をとちつた。

「やあい、ほんとに泣いとるぞ」

一郎がはやした。ほかの男の子たちも一緒になつて、

「泣いとる、泣いとる」

と、からかつた。

「皆さんなぜ笑うのですか。房子さんは、一生懸命にやつて、自分が劇の中の娘になりきつていたから涙が出たのです。よく登場人物の気持ちになれたと、先生はほめてあげたいくらいですよ。皆さんも見ならつて下さいね」

川村先生の言葉で、男の子たちは恥ずかしそうにうつむいた。房子は誇らしい気持ちになつた。

川村先生は教育熱心だつた。休校日には必ず自転車で児童の家をまわつた。農繁期になると長期欠席をする子供がふえるため、登校させるよう親を説得するためだつた。子供でも働き手として農作業や子守をさせる家としては、学校を休ませるのは当然ぐらいの考え方をしていた。耕地面積の少ないこの村では、村の半分以上が小作農で、どの家も子供が

五人から七、八人もあった。

川村先生は、そんな家々へ度々足を運んだ。そして親を熱心に説得した。その結果、幼い弟妹をおんぶして登校する子供たちが何人も出た。授業中に背中の幼児がむずかると、先生は、外へ出ていいから、あやしてらっしゃい、と教室から出ることを許した。そして、休憩時間にその子に授業の内容を説明した。それでも足りないとなると、プリントにして下校時に渡し、はげました。そんな子に限って勉強熱心だった。

先生は昼食の弁当を児童と一緒に食べた。先生の弁当は手作りで、おかずがたくさんあった。

「これ、先生が作った玉子焼きだけど、おいしいかどうか食べてみて」

麦飯に梅干し一つだけという子供のアルミの弁当箱のふたに、先生は玉子焼きや小魚の佃煮などを配ってまわった。弁当を持って来ない子供がいれば、箱ごと渡してしまうこともあった。そして、食後の休み時間には必ず童話を読んで聞かせた。子供たちはそれが楽しみで、よそのクラスから聞きに来る子もいた。

梅雨に入ってから、毎日のように大雨が降った。前の年は大旱魃で、村中が総出で雨乞いをしたり、水盗人が出たりした。そのため米の作柄は例年の半分にも満たなかった。それだけに、この年の収穫に大きな期待をかけていた。田植えの時期の大雨は、やや不安があるものの村人たちは喜んで植えつけ作業に精を出した。房子の家でも、人を頼んで総出